
メッセージ

夢野来人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メッセージ

【Nコード】

N7161K

【作者名】

夢野来人

【あらすじ】

メッセージとは過去から未来へ贈るもの。大きく分けると二種類のものがある。一つは、過去の失敗を繰り返さないために未来へ警鐘すべきもの。もう一つは、過去の成功を未来でも再現を容易にするために伝えるもの。前者は『戒律』と呼ばれており、後者は『術』として受け継がれている。

メッセージは伝えるべき人に正しく伝えないと大変なことになる。そこで、メッセンジャーの役割が非常に重要になってくるのだが…。平凡な高校生活を送っていた春菜と幸四郎が、ふとしたことから

メッセンジャーに選ばれてしまい悪戦苦闘する。彼らは何故メッセンジャーとして選ばれたのか。果たして、二人はその重責をまっとうすることができるのだろうか。

？怪しく光る封筒（前書き）

何気ない高校生の朝の風景。春菜と幸四郎は目覚めたときにある封筒を発見する。それはどこから送られてきたのか。何のために送られてきたのだろうか。

？ 怪しく光る封筒

？ 怪しく光る封筒

「ああ、眠い。いやだ、もう7時じゃない。今日も遅刻しちゃうわ」
春菜は高校一年生。早起きがちよっぴり苦手な女の子である。

「あら。これ、何かしら」

目覚まし時計の横には、見慣れない封筒が置いてある。

「昨日までは、確かこんなものなかったわよね」

春菜は、その封筒に見覚えがなかった。

「そんなことより、早く着替えなくちゃ」

一通の封筒を気にしている余裕はなかった。あわてて着替えて部屋を出ようとした時である。

「いやだ。この封筒、今光らなかった？」

確かめようもないが、その封筒が一瞬光ったように見えた。

「ちよっと気になるなあ。でも、時間がないし。ええい、学校へ持って行っちゃえ」

春菜は封筒をかばんに押し込み、家を出たのである。

「幸四郎、遅れるわよ。起きたのー」

母親の声で幸四郎は目が覚めた。

「うわっ。やつべー。7時半かよ。遅刻、遅刻。あれっ」

幸四郎の枕元には、見慣れない封筒が置いてあった。

「何だろう。こんなもの、昨日はなかったけどな」

幸四郎は高校一年生。早起きが人の苦手な男の子である。

「ご飯よー」

「ごめん、母さん。ご飯いらない。さあ、早く学校へ行かなくちゃ。えっ」

部屋を出ようとした幸四郎の瞳に、一瞬怪しい輝きが映った。

「あれっ。今、こいつ光らなかつたか」

光源には、一通の封筒があるばかり。

「変だなあ。まあ、いいか。時間もないし、暇な授業の時にでも見てみよう」

幸四郎は封筒をポケットに押し込み、家を出た。

「はあ、はあ。春菜、おはよう」

自転車をこぎながら必死な形相をしている春菜に、これまた死に物狂いで全力疾走をしている幸四郎が声をかけた。

「なあに、今日も幸四郎と同じ時間なの。遅刻決定じゃない」

春菜は自転車をこぐ力を弱めた。

「俺もがっかりだよ。ここで春菜に出会って、間に合ったためしはないからな」

幸四郎も走るのを止めた。

「ねえ、幸四郎。5分の遅刻も1時間の遅刻も同じじゃない」

「そうだな。どうせ間に合わないなら、ちょっとオサボリしていくか」

「さんせーい」

二人は幼いころからの友達である。特別仲が良いというわけでもないが、男まさりの春菜にとってはいわゆるイタズラ仲間という奴で、子どものころから同じ町内であることもあり、悪いことをするときにはたいてい幸四郎と一緒にあつた。

「じゃあ、秘密基地に行くか」

「ああ、あのボロ小屋ね」

秘密基地は、裏山にある材木置き場にある。昔は、大工さんたちの材料の保管場所として使われていたが、大工さんも一人減り二人減り、今では一人もいなくなってしまった。使えそうな材木はあらかじめ処分されてしまい、そこには割れた瓦や中途半端な材木の切れ端が置いてあるだけだ。

幸四郎の父親も大工の棟梁であつたが、ここ数年の不況がたたなり、去年から東京へ出稼ぎに行っている。もともと、この材木置き場は幸四郎の父が使っていたもので、昨年からは幸四郎が好き勝手に使っているのだ。割れた瓦や材木の切れ端をどうにかこうにかつなぎ合わせ、何とか雨風だけは凌げる高床式倉庫のような建物が、幸四郎自慢の秘密基地である。

「あのなあ。あれでも、苦労して作つたんだぞ」

「はい、はい。まあ、この時間じゃブラブラ歩いていても補導されかねないし、隠れ家としては良いわね」

悪いことをするときには直ぐに意気投合する。そんな二人であつた。

？秘密基地にて

？秘密基地にて

「やつぱり、暗いわねえ」

「しかたねえだろ。電気は来ていないんだから。ローソクで我慢しな」

昼間とはいえ秘密基地には窓がない。締め切った空間は薄暗かった。幸四郎がローソクに灯をともしたときである。

「やだ、幸四郎。あなた、懐中電灯でも持ってるの」

「学校へ行くのに、懐中電灯を持っていく奴はいないだろう」

「でも、今ポケットの中で何か光ったわよ」

「そんなはずないだろ」

幸四郎はポケットの中に手を入れた。

「ほら、ポケットの中には何にも…」

幸四郎の手に何かが触れた。

「ああ、封筒が入ってた」

「えっ。何それ」

「何か知らないけど、今朝起きたら枕元にあつたんだ」

「うそー。これ見て」

春菜もかばんの中から、封筒を出して見せた。

「何でおまえも持ってたんだよ」

「今朝起きたら、目覚まし時計の横に置いてあったの」

「怪しいなあ」

二人は、しばし2通の封筒を眺めていた。

「やだっ」

「おまえも見ただよな」

春菜が出した封筒も一瞬光ったようだ。

「とにかく、開けてみましょうよ」

「そうだな。たちの悪いイタズラかもしれないしな」

「幸四郎の封筒から開けてよ」

「何言ってるんだ。春菜の封筒が先だ」

実際のところ、順番はどちらでも良かった。お互い自分が開けた
くなかったただけだ。

「男のくせに、意気地無しなんだから。いいわよ、私が開けるから」
意気地無しと言う言葉に幸四郎が反応した。

「何だと。誰が意気地無しだって」

「本当は怖いんですよ」

「こんなもの怖いわけないだろう」

「無理しなくてもいいわ、私が開けてあげるから」

「いや、俺が開ける」

「私が開けるわよ」

「俺だ」

「私よ」

「両方とも俺が開けてやる」

「じゃあお願い。さすが、男の子」

駆け引きは春菜の方が一枚上手のようだ。

「いいか、開けるぞ」

幸四郎は春菜の封筒から開けることに決めた。

「それっ。なんだなんだ」

「たいしたものじゃないわね」

中には、一枚の紙切れが入っているだけだった。

「何も書いてないな」

「あぶり出しじゃないの」

「そんなバカな」

冗談半分で、紙をローソクにかざして見た。

「あら、色が変わってきたわ」

「何か書いてあるぞ」

紙から文字が浮かびあがった。

*** あなたを戒律メッセンジャーに任命する ***

「なに、どういうこと。ずいぶん古風な方法を使ってるじゃない」

「わかんねえな。俺の封筒はどうなんだ」

幸四郎も自分の封筒を開けてみた。

「幸四郎の封筒にも紙切れが入っているわね」

「これもあぶり出しか」

こちらの紙もあぶってみた。

「あつ。出てきた、出てきた」

*** あなたを術メッセンジャーに任命する ***

「私のが戒律で、幸四郎のは術ね。なんのことかしら」

「しかも、メッセンジャーに任命ってどういうことなんだ」

どうやら二人は、何か良からぬもの選ばれたようであった。

？ 学校にて

？ 学校にて

「何だか気味が悪いなあ」

「そうねえ。こんな紙きれに振り回されるのもばかかしいわね」

「元に戻しておこう。はい、これが春菜の封筒」

「いらないわよ、こんなもの」

「ここで捨てるわけにもいかないだろ。学校のゴミ箱に捨てちゃおうぜ」

「それもそうね。そろそろ、学校に行かなくちゃ。あんまり遅くなると、おうちに電話されちゃうもんね」

「ああ。そうなると、やつかいだ。とりあえず、学校へ行こう」

二人は、遅ればせながら学校へ行くことにした。

■■■ キンコーンカンコーン キンコーンカンコーン ■■■■■

「はい、みなさん。今日は転校生の子を紹介いたします。土岐くんです。土岐くんのお父さんは考古学者の先生です。なんでも、この裏山に何か新しいものが発掘されそうだということで急遽引っ越されてきました。仲良くするように」

「幸四郎、考古学だって」

「ああ。そういうえば、見るからに博士って感じだな」

土岐のいでたちは、分厚い底のめがねに白い長めの服、もじやもじや頭に団子鼻。

「あだなは、博士で決まりね」

「あれっ」

「やだっ」

「その二人。静かにするように」

春菜と幸四郎は肩をすくめた。

■■■ キンコーンカンコーン キンコーンカンコーン ■■■■■

「はい。今日はこれまで。みんな、道草せずに帰るんだぞ」

「先生、さようならー」

高校生にもなつて、道草をせずに帰れというのは無理な相談である。第一、すぐに家に帰っても、ロクなテレビなどやっていないし、明るいうちからテレビゲームをする気にもなれない。読書が趣味なんて奴は、ほぼ絶滅したであろうし、塾へ通う気にもなれない。ましてや、家でお勉強なんて試験前でもなければ考えられないというのが、春菜と幸四郎であった。お互い付き合っている異性がいるわけでもなく、部活にも入っていないかった。

「おい、春菜。おまえ、あれ捨てたか」

「何よ。幸四郎こそ、もう捨てたの」

春菜と幸四郎は、同じクラスであった。

「それが、学校にいるあいだも何回か光ったんだ。何だかちょっと気になってきちまつてな」

「私もそうなのよ。ほら、また光ったわ」

バカバカしい封筒だとは思いつつ、二人はまだ封筒を捨てずにいた。

「ちょっと、帰りに。来ないか」

「どこへ」

「秘密基地」

「やだー。また、あのボロ小屋」

「みんなの前で、見せるわけにもいかないだろう」

事実、不思議な封筒は二人だけの秘密であった。

「しかたないわね。行ってあげるわ」

春菜にしても気になっているのは確かだ。二人は再び秘密基地へ行くことにした。

？ 増えるメッセージ

？ 増えるメッセージ

秘密基地に着いた二人は、さっそく封筒を取り出した。

「どうでもいいけど、メッセンジャーって何するんだろっな」

「そうね。なんて書いてあったっけ。もう一度見てみましょう」

「そうだな。おやっ」

「どうしたの、幸四郎」

「中身が2枚になっている」

「朝から入っていたんじゃない」

「いや、確かに朝は1枚だったはずだけど」

「いいから、開いてみて」

「ああ。これは、1枚目だな。術メッセンジャーに任命するって書いてある」

「じゃあ、2枚目は」

「どれどれ。これもあぶり出しか。あつ、何か書いてある」

「なんて書いてあるの」

「ほら、見てごらん」

*** まやはならにぞうあり *****
どうやら、手紙の続きのようである。

「マヤは奈良に象あり。なんのことだろう」

「マヤってマヤ文明のことじゃない。マヤ文明と奈良に何かの共通点があつて、そのキーワードが象ってことじゃないかしら。私の方にも何か入ってるわ」

春菜の封筒にも2枚めの紙が入っていた。

*** いったいいまはじゅひようとめしつり *****

「一体今は樹氷と飯釣り。どうも何かの暗号のようね」

「俺の方には場所を指定する語句が入っているから、春菜のにも入

つてるんじゃないかな」

「そうね。一体って、あたり一体ってことかしら。そうか、まわりが樹氷で囲まれているほど寒いところで、飯釣りっていうと飯になるものを釣っているということだから、山中湖じゃないかしら」

「北海道の湖ならたいてい凍ってるんじゃないかな」

「それもそうね」

封筒の中身はどうやら暗号のようである。しかも、1枚だった紙は今は2枚。まるで、手紙のようである。

「ねえ、幸四郎。これって、私たちへの手紙なんじゃないかしら」
「誰から」

「それはまだわからないけど、私たちに何かしてほしいんじゃない」「うーん。謎だらけだな」

実際、今日の出来事は不可解だった。朝起きたら、春菜と幸四郎に光る封筒が届いていた。中身は一枚の紙切れ。戒律だの術だののメッセンジャーに任命すると書いてある。そして、今度は2枚目の手紙。わけのわからない言葉。今のところの手がかりはこんなところだ。

「なあ、春菜」

「なあに」

「この手紙、これからも続くのかな」

「続くんじゃないかしら。どうみたって、完結しているようには見えないもの」

「だよな。だとしたら、何らかの対策が必要だな」

「どんな？」

「俺たち二人で考えていても、解決できそうにないだろ。3枚目の手紙もきつと来る。そして、それもおそらくは解読不能の手紙」

「そうね。怖いって感じはしないけど、何かを頼まれているような気がするわね。しかも、セキュリティがかかっていて、ほかの人に知られてもただの紙きれにしか見えない」

「そうか。セキュリティのための暗号か。それにしても、伝えたい

俺たちに伝わらないようじゃ意味がないな」

「困ったわね。幸四郎、暗号解読の得意な友達いないの」

「そんな友達は…」

幸四郎は身のまわりの友達を思い浮かべた。スポーツだけ得意な奴、バイトばかりしている奴、自宅から2時間自転車で学校に通う奴、大食いなら誰にもまけない奴…。

「どう、いる」

「ロクな奴がいない。春菜の友達はどうなんだ」

「そうねえ…」

春菜も友達を思い浮かべてみた。おしゃれに詳しい子、バーゲンの日時場所にめっちゃ詳しい子、安くておいしい食べ物屋さんに詳しい子、お料理が得意な子…。

「どうだい、誰かいそう」

「ダメねえ。みんなそれぞれ特技を持ってるんだけど、頭を使う系には縁がなさそうね」

二人とも体を動かすのは得意だが、頭を使うのは苦手である。類は友を呼ぶもので、友達も勉強が趣味とか、インターネットおたくとか、クイズを解くのが大好きとか、そういった友達はいなかった。「そうだ。今日転校してきた博士なんてどう」

「あいつなら、ピッタリだ」

本人の同意を得る前に、この謎解きの協力者は博士しかいないと、二人の直感は一一致したのであった。

？博士の実力

？博士の実力

「博士つて、うちはどこなんだろう」

「そういえば、お父さんがこの裏山で発掘作業をするとかしないとか行つてたわね」

二人は、学校で博士が紹介されたときのことを思い出していた。

「つてことは、この近くに発掘現場があるつてことだよな」

「そうね。でも、ここからはそんな現場らしきものは見えないわよ」

「山のこちら側から見えないならば、向こう側にあるつてことだな」

「最近トラックをよく見かけるけど、何か関係あるのかしら」

「よし。行ってみるのかなさそうだな」

「そうね。行ってみましょう」

さっそく二人は外に出た。4月になったとはいえ、樹木に覆われている山は肌寒い。山の頂上まで登れば、向こう側が見えるはずだ。歩くこと30分。

「もう少しね、幸四郎」

「結構きついな。あれっ。あんなところに小屋がある。あんなものあつたっけ」

「知らないわよ。それに、まだ新しそうじゃない」

頂上間近というところで、大きな樹木に隠れ、その小屋はひっそりたっていた。

「まさか、あれが発掘現場つてこともないよな」

「とにかく、行ってみましょう」

二人は小屋に向かって小走りに近寄った。

「あっ」

突如、小屋の中から一人の人物が出てきた。

「あの子、博士じゃない」

「こんなところに住んでいたんだ」

目の前に現れたのは、同じクラスに転校してきた博士であった。博士は驚いている風もなく、なぜこんなところでクラスメイトに会うのか、まるで予知でもしているようであった。

「やあ、きみたち。やつぱりここに来たんだね」

「やつぱりってなんだよ」

「きみたちは必ず来ると思っていた」

「何ですって」

「なぜならば、学校でのきみたちの態度から察するに、いつもとは違う何かが身の回りに起こっていることは想像に難くない。そして人目を避けるように、幸四郎くんはポケットの中を述べ15回、春菜ちゃんはかばんの中を12回のぞきこんでいた。そのうち、幸四郎くんのポケットの中で怪しい光が少なくとも3回、春菜ちゃんのかばんの中では2回光っているのを確認している。そして、幸四郎くんのポケットから封筒の切れ端が見えた。二人の持っている怪しく光る物体は、おそらく封筒であろう。そして、二人の落ち着かない態度から察するに、封筒の中身は理解しがたいもの、常識の範囲を超えた謎の手紙が入っているはずだ。ならば、その謎を解ける人物を探そうという話になるだろう。ところが、同じクラスの中にはそんな話をできそうな適当な人物は見当たらない。少なくともぼくには見当たらなかった。そして、幸四郎くんのズボンのすそに付着している草は、春菜ちゃんのスカートに付いている草と同じだ。二人は今日遅刻してきたが、それは同じ場所から来たことを意味する。しかも、その草は割とめずらしい草だね。この辺では、この裏山にしか生息していない草なんだ。つまり、二人は学校へ来る前に、この裏山にいた。そして、学校が終わってから裏山に行く。なぜならば、そこには平日学校をサボっていても怪しまれないような、隠れ家的場所が存在しているからであろう。そこで、二人は謎解きを始める。しかし、朝の表情よりも複雑になっているところを見ると、おおかた謎が増えたといったところであろう。これはもはや自分た

ちの手にはおえない。協力者が必要である。そこで、転校生であるぼくを思い出したんじゃないかな。まだ、今日会ったばかりでどこまで信用できるかはわからないが、他に手立ても考えられないし、親が考古学者ということを考えても謎解きには興味を持っているだろうし、多少の知識も持ち合わせているだろうと考えた。でも、きみたちはぼくのうちを知らない。知っている情報といったら、親が裏山で発掘調査を始めるということぐらいだ。探すとしたら裏山だ。頂上からなら裏山を一望できる。そこで発掘現場に行き、あわよくばぼくの親から居所を聞きだそうということではないかな。そして、頂上に行く道はこの道しかないんだ。この道を通れば、小屋に気づく。だから、きみたちは必ず現れると思って待っていたんだ」

「おい、春菜」

「すごいわね」

「こりゃ、本物だ」

二人は、博士を協力者にすることに決めた。

？手紙の謎はアナグラム

？ 手紙の謎はアナグラム

「さあ。二人ともそんなところに突っ立ってないで、中に入りなよ」
博士は、二人を小屋の中へ案内した。

「博士って、ここに住んでるの」

「ああ。父さんは発掘現場事務所に泊まることが多いから、たいていばく一人だよ」

「お母さんは」

「ある日、突然いなくなっちゃった」

「そりゃ、悪いこと聞いちゃったな」

「なあに。どうせすぐにわかることさ。それより、二人の持つてる手紙を見せてくれないか。ちょっと興味があるんだ」

「もちろん、そのつもりさ。これが俺の方に入っている奴だよ」

博士は手紙をひろげ、しばらくの間見つめていた。

「これ、単純なアナグラムだね」

「なあに、アナグラムって」

「文字の順番を並び替えてあるんだ。まあ、基本的な暗号みたいなものさ」

「すごいな、博士。で、なんて書いてあるんだい」

「『まやはならにぞうあり』って書いてあるだろ。この文字を並び替えるんだ」

「ええと。『ぞうはならにやまあり』、こんな感じがいい」

「ああ、惜しい。でも、いいせんいつてるよ。キーワードは『謎』と考えればわかりやすいんじゃないかな」

「わかったわ。『謎あり』ね。ってことは、残ってるのは、『ま』、『や』、『は』、『ら』、『に』、『う』、ね。『山』も入っているね」

「おい、春菜。それ、『裏山』じゃないか」

「えっ。『裏山？』すると、あとは、『は』と『に』だけね」

「そうか。『裏山に謎はあり』ってことか」

「やっつと、わかったようだね」

「私の手紙も見て」

春菜は、封筒から手紙を取り出した。

「どれどれ。『いつたいいまはじゅひようとめしつり』か。こっちは、ちよつとむずかしそうだな」

博士は目をつぶり、腕を組んで歩き出した。

「私たちも考えましょうよ」

「そうだな」

すると、博士は何かひらめいたようにこちらを向いた。

「きみたち。手紙の中身はこれだけかい？」

春菜と幸四郎が見せたのは、2通めの手紙だ。1通めの手紙が封筒には残っていた。

「ごめん、ごめん。実は、最初に届いた手紙があるんだ。でも、これは役に立たないんじゃないかな」

「見せてもらんよ」

「『あなたを術メツセンジャーに任命する』って書いてあるね。春菜ちゃんも持つてるのかい」

「ええ、あるわ。これよ」

「『あなたを戒律メツセンジャーに任命する』だね。なるほど、ってことは、術と戒律がキーワードだろうな。そうか、わかったぞ」

「なんて書いてあるんだい」

「『いつたいいまはじゅひようとめしつり』から『術』を除くだろ。『戒律』って言葉は入っていないけど、『戒め』ならある。それを除くと、『いつたい』、『と』、『ひよう』、『り』となる」

「『表裏一体』ね」

「その通り。『戒めと術は表裏一体』ということだろうね」

「博士。手紙の内容はわかったけど、どうということなんだい」

「任命するってことだから、きみたちは選ばれたんだろうね。戒律メッセンジャーと術メッセンジャーとしてね」

「なんだい、それ」

「父さんから聞いた話だけど、過去の人は未来の人にあるメッセージを伝えようとしているらしいんだ」

「どんなメッセージなの」

「簡単に言っと、失敗事例と成功事例を伝えようとしている」

「やさしいんだな」

「人類の繁栄のためには大切なことさ。父さんの考古学の研究も、実はこのメッセージ探しと言ってもいいんだ。それは埋もれている場合もあれば、特別な人物だけに受け継がれている場合もある」

「そんなもの伝えてどうするの」

「失敗を繰り返さないためには、失敗事例があればいいだろう。こうしちゃうダメだよって教えてくれたら、失敗せずにすむこともある。逆に、こうすればうまくいくよっていう成功事例を教えてくれたら、試行錯誤を繰り返す手間がはぶけるだろう」

「でも、ダメだっていうことをしなくなっちゃう人だっているでしょ。うまくいく方法だって、いつもいつもうまくいくとは限らないし」

「そこなんだ。薬は使い方が正しければ、病気を治すことができる。でも、使い方を誤ると毒にもなるんだね」

「やだー。なんだか怖いわ」

「そこで、古来よりメッセージは慎重に慎重に受け継がれてきた。それが、最近どうもおかしくなってきた」

「どんなふうによ」

「伝えたくない人にメッセージが漏れてしまっているらしい」

「そりゃあ、困るな」

「そこで、メッセンジャー選びは重要な課題となっている」

「まあ。選ばれてしまった人は、責任重大ね」

「ってことなんだよ。お二人さん」

「おいおい、待ってくれよ。そんな重大な役割を押し付けられても困るよ」

「そうよ。私たちに、いったい何ができるっていうの。何をさせようというのよ」

「それは、3通めの手紙が教えてくれるんじゃないかな」

春菜と幸四郎は、顔を見合わせた。

？ 3 通めの手紙

？ 3 通めの手紙

博士に協力者をお願いしようと思っていたが、それは博士にとって推測されていたことであつた。博士も快く協力してくれることになり、封筒に新たな変化が起きたら教えてくれということである。その場を別れた。

「よかつたな、春菜」

「ほんとよね。博士も協力してくれるって言ってくれたし」

「せっかく頂上まできたんだから、向こう側に降りてみないか」

二人は、この裏山の反対側には行ったことがなかった。

「でも、ここから上は立ち入り禁止よ。幸四郎登つたことある？」

「いや。子どものころから、ここだけは登るなって言われている」

「やつぱり。でも、変よね」

「ああ、確かに変だな。絶対に登るなと言われているだけで、頂上に何があるとか、なぜ登っちゃいけないかというのは聞いたことがないな」

「入っちゃいましょうか」

「ああ、確かめてみる必要がありそうだな」

二人は、禁断の領域に足を踏み入れる決意をした。昔からの言い伝えで、山の頂上に登つた者は帰つてきた試しがないという。今まではその言い伝えを疑いもせず盲目的に信じ、小学校に入る頃には話題にもなくなっているぐらいタブーの領域なのだ。

しかし、今朝からの不思議な出来事と何らかの関連があるのではないかと、二人の直感は一一致したのであつた。

二人は立ち入り禁止の古びたロープをかくぐり、さらに山を登り続けた。禁止区域を登り続けること30分。ついに頂上に上りつめた。

「ここが頂上か」

「こちら側の景色とはずいぶん違うわね」

「そうだな。山の向こう側には、建物が全然なさそうだな」

「建物どころか、霧がかかっていてよく見えないわね」

「うわ、やばいぞ。こちら辺も霧に包まれてきた」

「どうしよう。私たち帰れなくなっちゃう」

「落ち着くんだ、春菜。こういうときは動いちゃだめだ。それにしても、一時避難する場所がほしいな」

「あつ。あそこを見て、幸四郎。小屋じゃない？」

山の向こう側の少し下ったところに、怪しき建物が見えた。

「こりゃ、いけない。雨まで降ってきやがった。春菜、良くて悪くてもあそこに避難するしかなさそうだぞ」

「そうね、行きましよう」

二人は、怪しげな小屋に向った。

「なんとか着いたぞ」

小屋の中は薄暗く、ところどころにくもの巣があっただが、とにかくにも雨風だけはしのげた。

「ねえ、幸四郎。懐中電灯持ってない？」

「そんなもの学校に持っていく奴はいないって言っただろう」

「でも、今光ったわよ」

「ってことは、もしかすると封筒に新しい手紙が届いたのかもしれないな」

「そうね。携帯でも、メールを着信すると光るものね」

「でも、この暗さじゃ見えないな」

「あら、こんなところにランプがあるじゃない。幸四郎マッチない？」

「秘密基地のローソクをつけるために、ライターだけはいつも持ってるぞ」

「はやくつけてよ」

「よし。どうだ」

「ついた、ついた」

「オイルは入っていたようだな。じゃあ、手紙を見てみよう」

「私のから見るわね。わっ、入ってる。3通めの手紙よ」

「どれどれ。なんて書いてあるんだ」

*** 山を降りるには、来た道を帰ろうとしてはならぬ ***

「なに、これ。じゃあ、どうやって帰れっていうの」

「俺の方はどうか」

*** 秘密の扉を見つけること それがすなわち術の第一歩 ***

「幸四郎。どういうこと」

「うーん。わからないけど。これだけは言えそうだな。春菜の手紙は何々するなという戒律の一種。俺の方は何々しろという術の一種ということだろう」

幸四郎には、だんだん見えてきた。手紙の主は二人がメッセンジャーにふさわしいかどうか試しているんだと。

「私たち、どうなるのかしら」

「きつと、試されているんだ」

「試す？何を」

「メッセンジャーとしてふさわしいかどうかさ」

「もし、ふさわしくないと判断されたらどうなるの」

「おそらく、言い伝えのように元へは戻れない」

「どういうこと？」

「やはり、ここは別世界。普通の人は着ちやいけないところなんだ」

「言い伝えどおり、立ち入ると帰れなくなるってこと？」

「ああ。多分そうだ」

「やだあ。もう帰れないの」

「いいや。俺たちには、この手紙がある。俺たちがメッセンジャーとして認められたなら、きつと帰れる」

「そうか。どうやら、私たちに選択肢はないようね」

「そうだな。帰るためには、自分たちで手紙の謎を解き、メッセージを引き受けるしかなさそうだ」

「博士もいないのに、私たちだけで解けるかしら」

ブルルルッ、ブルルルッ。

「おい、春菜。おまえの携帯ブルってるんじゃないか」

「やだ。こんなところへ、電波通じるの？」

春菜は、おそろおそろ携帯を手にとった。

？メールの差出人

？メールの差出人

「電話か？」

「いいえ、メールみたい」

「いつたい、誰から」

「ちよつと、待ってね。差出人はと。やだ、博士じゃない」

「早く、見てみるよ」

『このメールが届く頃には、君たちは3通めの手紙を手にしていることだろう。しかも、我々の世界とは異次元の世界に迷いこんでいると思われる』

「博士つて、私たちがこうなることを知っていたみたいね」

「メールなんて使わずに、電話してくればいいのにな。続きは何て書いてあるんだ」

『電話をしたいのはヤマヤマだけど、つながらない。次元のひずみにブロックされてしまっているようだ。音声はつながらないけど、画像は送れるようなんだ』

「ねえ、幸四郎。音声が伝わらなくて画像だけ伝わるなんてことあるのかしら」

「そんな話、聞いたことないな」

『そんなバカなと思っっているだろうけど、こんな経験はあるだろう。テレビの海外中継で、画像だけ見えてて音声がつながないことがあるだろう』

「まあ、博士つたら何でもお見通しね。でも、それなら経験あるわ」「俺も何度か見たことあるな」

『原理は同じようなことで、通信電波が微妙に違うのが原因だ』

「でも、これで心強くなったわね。博士がいれば何とかなるんじゃない」

「そうだな。さっそく、返信しようぜ」

「ちよつと、待って。まだ、何か書いてあるわ」

『でも、浮かれてはいけない。こちらからの電波は増幅したものを送信しているため君たちのもとへ届くが、君たちの携帯からの電波はキャッチできない。つまり、交信は一方通行となる。ぼくの推理がどれだけ当たっているか、君たちの理解力がどれだけあるか。メーッセージの送り主との戦いはここからが本番となる。まずは、第3の手紙を良く見てくれ。そこには、戒律と術に関する記述があるはずだ。そして、そこには君たちが元の世界へ帰る方法が書かれているはずなんだ。また、連絡する』

「まいったな。交信は一方通行か」

「無いよりマシよ。それに、私たちのこの状況を知ってってくれる人がいるっただけでも、いいんじゃない」

「それもそうだな。じゃあ、謎解きでも始めるか」

「来た道を戻ろうとしても帰れないってことよね」

「ああ、普通の人は必ず来た道を帰ろうとする。その時点で、すでに間違っているわけだ」

「そうね。帰るためには、秘密の扉を見つけないといけない。秘密の扉って何かしら」

「おそらくは、元の世界とこの世界をつなぐ時空の扉なんだろうな」
先ほどまでの土砂降りが収まったのか、壁の隙間から日差しが入ってきた。

「あら、やんだのかしら」

「外に出てみよう。おやつ」

「どうしたの、幸四郎」

「こんなところに、扉なんてあったっけ」

「ちよつと、待ってよ。こっちにもあるじゃない」

「扉は全部で3枚。俺たち、どの扉から入ってきたんだ」

「入ってきた扉を選んでしまうと、俺たちは永久に帰れなくなるってことかな」

「どうしよう、幸四郎」

「どれが、秘密の扉なんだ」

二人は、3枚の扉の前に立ち尽くすのであった。

？運命の選択

？ 運命の選択

「扉は3枚。そのうち1枚は入ってきた扉だ。その扉を開けてはいけない」

「そうね。でも、残るは2枚の扉。どちらを選んでもいいのかしら」
「それはわからないな。言えることは、少なくとも入ってきた扉だけは選んではいけないということだ」

3枚の扉をじつと眺めていて、春菜が叫んだ。

「あつ。この扉見て」

「どうしたんだい」

「まわりが濡れているわ」

「そうか。外は雨だったからな。これが入ってきた扉か」

不意に春菜の携帯が振動を始めた。

「あら、やだ。また、ブルッてる」

「博士からか」

「見てみるわね」

予想通り、博士からのメールであった。

『きつと、きみたちは何かを選択しなければならぬ状況に陥っているはずだ。なぜならば、メッセージの主はきみたちをメッセージヤーとして適任者であるかどうか試す必要があるからだ。さすがに記述式試験はしないだろうから、ある条件下のもとで君たちの対応を見ることにより適正を試すと考えられる』

「すごいわね、博士って」

「ああ。いい人物を協力者に選んだってことだ。博士に会っておいて良かったな。二人だけなら、とくにパニッてるだろう。で、続きは？」

『もちろん選択肢の中に正解はあると思われるが、注意してくれよ。』

いろんな罣がしかけてあるだろうからな。実際にはどんな問題に遭遇しているかわからないから、はっきりしたことは言えないが、最初に直感で思い浮かんだ答えは、まず不正解と思って間違いない。では、がんばってくれたまえ。また、連絡する」

「ねえ、幸四郎。この外枠が濡れている扉は違うつてことかしら」

「そんなはずはないだろう。俺たちは雨に降られてここへやってきた。外は雨だった。つまり、濡れている扉が正解ってことだろ」

「ちよつと、待って。床を見て」

薄暗い中、幸四郎は扉から床へ目を移した。

「おや。この濡れている扉の下にはマットが敷いてあるな」

「こつちの扉の下は、新聞紙よ」

「最後の扉の下には何もないな」

3枚の扉の下には、マット、新聞紙、何もないとそれぞれ違っていた。

「この新聞紙濡れていないわね」

「じゃあ、俺たちが入ってきたのはこの扉じゃないな。やっぱり、この外枠の濡れている扉だろう」

その扉の下には布製のマットが敷いてあった。

「このマットが濡れていれば決まりね」

そう言いながら、春菜はマットをそつとさわった。

「これで、一つ消えたな」

「待って！濡れていない」

「そんなバカな。乾いたんじゃないか」

「それに見て。何も敷いてない扉の下にわずかばかりの靴の跡が見えるわ」

「どれどれ。ほんとだ。消えかかっているけど、こつちの跡は俺の靴のものだ」

「こちらは私の靴跡よ」

「俺たちは、この扉から入ってきたんだ」

二人が入ってきた扉はわかった。あとは、残る2枚のうちどちら

を選ぶかという問題が残っている。

「残るは2枚ね」

「ああ、二つに一つだ。何かの選択基準が必要だな」

「そうね。論理的根拠がほしいわね」

外枠が濡れていて下にマットが敷いてある扉か、それとも新聞紙が敷いてある扉か。どちらかに正解はあるはずだ。

「わからないな」

「ええ。わからないわ。博士からのメール来ないかしら」

「そんなに都合よくは来ないだろう」

「一人ずつ、別々の扉へ進みましょうか。どちらかは正解よね」

「だめだよ、春菜。それは、どちらか是不正解ってことだろ」

「でも、必ず一人は正解よ」

「まだまだ難問が続くだろうし、こんなところでフィフティフィフティを使っちゃだめだな」

「なにそれ。クイズミリオネアみたいね。じゃ、ここはオーディエンスかしら」

「ここに観客はいないよ」

「そんなあ、不利じゃない」

「そのかわり、4択ではなくて3択だ」

「そうか。あながち不利とも言えないわね」

こんなときでも冗談が言える二人。余裕があるのか、天然なのか。それとも、それがメッセンジャーとしての資質なのだろうか。

「いいか、春菜。整理してみるぞ。俺たちは、最初外枠の濡れている扉から入ってきたと思った」

「そこで博士からのメールが届いたのよね」

「ああ、そうだ。いろいろな罠が仕掛けられているというヒントを得た。そこで、よくよく見ると、靴跡を発見した。入ってきた扉がわかったんだ」

「でも、残る2つの扉のうちどちらが正解の扉かがわからないのよね」

「そこだ。この問題は、入ってきた扉を見つける問題じゃない」

「そうよ。出るべき扉を見つける問題よ」

「だろ。罠を仕掛けるとしたら、どうする春菜」

「そうか！正解の扉を選択肢から外させることを考えるわ」

「その通り。俺たちは、最初に外枠の濡れた扉を選択肢から外そうとした。この扉を外してしまうと、残る扉に正解があった場合、正解する確率は50%。偶然正解してしまう場合もある」

「それでは、罠とは言えないわね」

「そうさ。最初に選択肢から外そうとした扉が正解であったならば、残る扉が正解である確率は0%。つまり、どちらを選ぼうが確実に不正解を選ばせることができる。これこそ、罠というのにふさわしいんじゃないかな」

「ということは、外枠が濡れている扉が正解ってことね」

「俺なら、そうする」

「どうする、幸四郎。ファイナルアンサー？」

「ああ、ファイナルアンサー。行くしかないだろう」

二人は、扉の外枠が濡れている扉を選択した。

？扉の向こうは

？扉の向こうは

「幸四郎。気をつけてね」

「何見送ってるんだよ。春菜も一緒に行くの」

「やっぱ、そうなっちゃうかしら」

「そりゃあ、そうだろう」

二人は外枠が濡れている扉を開けた。

そこは銀世界。しびれるような寒さであった。

「やだー。どこに着ちゃったのよ。もう、役に立たないどこでもドアね」

「ああ。とんでもないところへ来てしまったみたいだ」

「また、避難するところを探さないといけないじゃない」

あたりに小屋らしきものは見当たらなかった。

「外れたか」

幸四郎は、一瞬選択した扉が間違っていたのではないかと思った。
「キヤー」

「どうした、春菜。大丈夫か」

幸四郎の視界から春菜の姿が消えた。

「こうしろー、早くたすけてー」

春菜の声は下の方から聞こえた。

「何やってんだよ」

「誰よ、こんなところに落とし穴なんて作ったのは」

春菜は、雪の穴の底に落ちていた。

「こんなところに穴があるなんて」

「いいから、早く助けてよ」

「よし、待ってる。すぐ行くから」

幸四郎も穴の中へ降りた。春菜を抱き起こし、雪の壁に寄りかか

ろうとしたときである。

「やだー」

二人は雪の壁を突き破った。そこには、通路が続いていた。
「何だよ、これ。まるで、秘密の抜け道だな」

「どこに続いているのかしら」

二人が選んだ扉は、正解だったようだ。

「どうする、春菜」

「どうもこうもないでしょう。こうなりや、行くしかないわ」
覚悟を決め、二人は通路を進んでいった。

ほどなく、通路は二手に分かれていた。

「ここで、まだどちらかを選ばなければならなくなっただな」

「でも、今度は2択よ。確率は50%ね」

「ああ。でも、ヒントになるような手がかりがまるでないぞ」

「そうだ。また、博士からメールが送られてきてるかもしれない」
「だといいいけどな。見てみるよ」

春名は、期待して携帯を見た。だが、メールは届いていない。

「ダメだわ。来てない」

「こんな洞窟の中じゃ、電波も届かないかもしれないな」

「どうする、幸四郎」

「あれっ」

「あらっ」

「今、光ったよな」

「私のもよ」

二人の封筒は、ともに怪しく輝いたのであった。

？ 4 通めの手紙

？ 4 通めの手紙

「届いたってことだよな」

「そうね。4 通めの手紙ということになるわね」

「とにかく見てみよう」

幸四郎は、手紙の中から4 通めの手紙を取り出した。

*** 迷ったときは心で感じる、頭で考えるのではなく心の目を
開け ***

「よくわからないわねえ。私のほうはどうかしら」

春菜も4 通めの手紙を取り出した。

*** 目の前のものにとらわれてはいけない、その奥に隠されて
いるものが見えなくなる***

「春菜の方もわからないな」

「ちよつと待つて。奥に隠されてるものって、抜け道のことじゃな
いかしら」

「そうか。この二つの通路を見ているだけでは、その奥にある抜け
道は見えないってことだな」

「それを見るためには、頭で考えるのではなくて心の目で見ろって
ことかしら」

二人は再び通路を見つめた。

「だめだ。暗闇が広がるばかりだ」

「ねえ、幸四郎。目を閉じてみて」

「そんなことしたら、余計見えなくなっちゃうだろう」

「いいから、いいから」

春名は先ほどから目を閉じている。何かが見えたのか、幸四郎に
も目を閉じろと言う。

「あれっ」

「ねっ。真っ暗じゃないでしょ」

「ああ。青や紫がらせん模様になっているのが見えるな」

「ええ。何だか幾何学的な模様に見えるわね」

「春菜にも、同じような模様が見えるのか」

「たぶん、同じだと思うわ」

「ってことは」

「そうなの。左側はぼんやりしているけど、右側は」

「ああ。青と紫のグラデーションだ。しかも、トンネルのように奥に続いている」

二人は目を開けた。

「これが、心の目で見ることかしら」

「かもしれないな。いずれにせよ、右を選ぶか左を選ぶか、客観的な判断材料はないんだ。頼りになるのは、今見えた映像だけだな」

「それは、どうやら右側を示しているようね」

「ああ。俺もそう思う」

行くべき道は決まった。二人が感じた方向は同じだったのだ。

「どうする、幸四郎」

「信じるしかないな」

「畏ってことはないかしら」

「メッセージの主は、俺たちに何かを伝えたいはずだ。もしくは、伝える代理人にしたいはずだ。こんなところで迷子になってしまっ
ては、やつらだって困るだろう。正解を見つけるためのヒントをく
れているんじゃないかな」

幸四郎は、メッセージの主とコミュニケーションをしている感
覚が芽生えた。

「そうね。それが、いい人が悪い人かはわからないけど、今は信じ
るしかないさそうね」

「人だといいたが」

「やだ。変なこと言わないでよ」

「とにかく、右の通路へ行ってみよう。いつまでも、ここに立ち止

まっているわけにもいかなからな」

「そうね。行きましよう」

二人は右の通路を選択し、奥へ奥へと進んでいった。

？生還

？生還

通路の中は暗かった。なおも進んでいくと、ぼんやりと光が見えてきた。

「おい、春菜。どこかに出れそうだなぞ」

「ほんとだ。薄日がもれている」

二人は光のもれている方向へ走った。走らないと、その光が消えてしまいそうな気がしたからだ。

「やった。どうやら出口だ」

「行きましょう、幸四郎」

全力で走った。光はどんどん近づいてくる。もう少しで届きそうになったときである。

「やばい。春菜止まれ」

「何よ、急に」

「ああ、ばか。落ちる」

「いやー。助けてー」

二人は出口寸前のところで、またしても穴の中へ転げ落ちていった。

「いてて。おい、春菜。大丈夫か」

「ええ。何とか無事みたい。それより、ここはどこ。私たちどこから落ちてきたのかしら」

二人が砂まみれになっているところへ、一人の男が現れた。

「やあ、きみたち。こんなところで、何をしているんだい」

その男の顔は、どこかで見たような気がした。

「あなたこそ、こんなところで何をしているんですか」

「ああ。驚かせてすまんね。私は考古学者の土岐というものだ。怪

しい者ではないから安心してくれたまえ」

「ねえ、幸四郎。土岐だって」

「そうか。博士のお父さんだ」

「うちの息子を知っているのかい」

「ええ。今日、同じクラスになったばかりなの」

「ああ、クラスメイトか。それは良かった」

「ねえ、おじさん。ここは、もしかすると発掘現場？」

「そうだよ。きみたちの通っている学校の裏山にあるんだ」

「幸四郎、聞いた」

「ああ、裏山だ。俺たちは戻ることができたんだ。ばんざーい」
「やったー。これで、帰れるわ」

小躍りして喜んでいる二人に、教授は質問をした。

「ところで、きみたちここへどうやって来たの」

「どうやってって、こつちの方から転げ落ちてきたんだけど」

「こつちから？」

「そうだよ。なあ、春菜」

と指差す方向を見ると、そこには発掘中の穴が掘ってあった。

「本当にここから？」

「ええ、そうよ。この穴の中からよ」

春菜はそう言つと、穴の中を覗き込んだ。

「ほら、こつちの……」

「おい。どうしたんだ、春菜」

「ない」

「ないって、何がないんだ」

「この穴、すぐそこまでしかない」

「何だつて。そんなことはないだろう。見せてみな」

幸四郎も覗き込んだ。

「……」

「そうか。きみたちはどうやら不思議な体験をしてきたようだね。
良かったら、私に聞かせてくれないか。お役に立てるかもしれない

よ
「

「どうする、幸四郎」

「どうもこうもないさ。博士のお父さんなら信用できるというもんだ。それに、この不思議な体験を説明してくれるかもしれない」

「そうね。協力者その2ね」

「はっはっは。その2ってことは、その1がいるんだね」

「はい。息子さんがその1なんです」

「ほほう。詳しく話してくれないか」

「じゃあ、私から」

春菜は、今朝からの出来事をすべて話したのだった。

？教授の研究

？教授の研究

話の一部始終を聞いた教授は、顔色一つ変えずにこう言った。

「そうか。きみたちも選ばれし者か」

「きみたちもって、他にも誰か知っているんですか」

「そうね。私たち以外にも、奇妙な手紙をもらっている人がいるの」

「ああ。私知知っているだけでも、過去に8人いた」

「えっ。8人も」

「そう、8人。しかも、戒律メッセンジャーと術メッセンジャーは2人1組だ。つまり、きみたちで5組めということになる」

「これは驚いたな。でも、なぜ教授のまわりにだけそんな特殊な人が集まるのだろう」

「そうよね。不思議だわ」

「集まってくるんじゃないんだ。私が自ら近寄って行っているだけさ」

「自らって、どういうことですか」

「最初は、偶然だった…」

教授の話によると、ある日考古学の発掘調査をしていると、どこからともなく2人の少年少女が現れた。どこから来たのかもわからないという。聞けば、何でも戒律メッセンジャーと術メッセンジャーに選ばれたということだ。この時は、さほど気にもしなかった。夢でも見ていたのだろうと思っていた。その二人は、自分たちには向いていない。メッセンジャーなどなるつもりはないと言い、その場を立ち去った。

数日後、その少年少女が謎の事故死を遂げた。新聞によると、古代遺跡を見学中に巨石が崩れ落ち、二人を圧殺したと書かれていた。奇妙な偶然かと思った。その後、しばらくは何もなかったが、3年

後のある日、教授は再び奇妙な二人組に出会うことになる。その子たちもメッセンジャーに任命されたと言っていた。不思議に思い、共通点を探しているうちにあることに気付いた。年代が同じなのである。1度めも2度めも、教授が発掘していたのは、1200年ほど前の地層のものだった。それ以来、教授は1200年前の文明的に絞りを研究を続けている。

「そんなことがあったんですか」

「それで、2組めの子たちはどうなったの」

「うーん。言いにくいけど、謎の変死をとげている」

「そんな。何か気味が悪いな」

「そうね。でも、1200年前って何があったのかしら。教授には、見当がついているの」

「そう、1200年前。そのころ栄えていた文明は、マヤ文明」

「まさか、マヤ文明からのメッセーじなんて言い出すんじゃないですよ」

「実は、そう考えている。おそらくは、マヤ文明の継承者に、きみたちは選ばれたんじゃないかな」

「そして、それを拒んだ者は」

「謎の死をとげているわけね」

「それからというものの、私は1200年前の地層を発掘し続けているんだ。マヤ文明の謎を解くためにね」

「なにかわかったんですか」

「ああ。その後さらに、2組の若者に出会った。やはり、メッセンジャーを任命されたと言っていた。しかし、皆本気で取り組まなかった」

「普通の人は、あまり興味を持たないかもしれないわね」

「気になるのは、メッセンジャー任命の年月が短くなってきたということだ」

「どういことですか」

「1組めから2組めまでは3年かかっていたんだ。ところが、3組

めまでは1年、4組めにいたっては半年だ。そして、きみたちに出会ったのは、それからわずか1ヶ月」

「教授の探し方がうまくなったのかな」

「いや。事はそんなに単純なことではなさそうだ。彼らはあせってきたんじゃないかな」

「あせるってことは、早く伝えなければならない理由でもあるのかしら」

「おそらく、そういうことだ。早く伝えて、早く行動を起こしてもらわないと、何か大変なことが起きるんじゃないかな」

「ところで、教授。3組め、4組めの人たちも死んじゃったの」

「いや。どうか。3組めの子たちは、行方不明だし。4組めの子たちは、原因不明の病にかかり入院中ということだけだ」

「いいです、いいです、教授。つまり、この役割を断ったり無視したりした人には災いが起こるってことですな」

「どうやら、そのようだ」

「おい、春菜」

「いいわよ、幸四郎」

「何だかしらないけど、なってやろうじゃないか。その、メッセンジャーとやらに」

このとき、春菜と幸四郎はメッセンジャーになることを決意した。

？博士の生い立ち

？博士の生い立ち

「ところで、博士もそのことは知ってるんですか」

「誰だい、博士って」

「ああ、すみません。俺たち勝手に教授の息子さんに博士っていうあだ名をつけちゃったんです」

「ははは。かけるのことが。確かに年の割には老けて見えるし、風貌からいくと私よりも博士っぽいな」

「かけるくんって言うんですか」

「そう、土岐かける。いい名前だろ。本人は気に入っていないみたいだが」

「時を駆けるなんて、素敵ね」

「自己紹介がまだだったね。私は土岐学。トキマナブよろしくね」

「こちらこそ。私は椎名春菜。しいなはるな春菜って呼んでね」

「俺は吉幸四郎。よしこうしろう幸四郎でいいよ」

「さて、今までのメッセンジャーの共通する点を整理しておこう」

「そうよね。ちょっと、気になるわ。年齢は？性別は？どんなメッセージを受け取っていたのかしら」

「そうだな。俺も気になるな。教授、知っていることを教えてくださいさい」

「メッセンジャーは、いずれも男女一組。年の頃は15～16歳。受け取ったメッセージは、気味悪がって捨ててしまっている。だから、私が見た手紙はきみたちの手紙が初めてということになる」

「そして、メッセンジャーを放棄した人たちは」

「闇に葬られるってことだな」

「そうなんだ。いずれにせよ、手がかりが少なすぎて研究が進まない。そこで、第五のメッセンジャーを見つけようと、この町に来た

つてわけだ。この裏山は、ちょうど約1200年前の地層でできているんだ」

「そうだったの」

「会うべくして、出会ったって感じですね」

「ああ、きみたちとも。そして、かけるともね」

「えっ。息子さんとも?」

「どういことですか」

「実は、かけるは私の息子ではない」

「何ですって?」

「そういえば、教授の奥さんのことは話に出てこないけど、何か関係があるんですか」

聞いてはいけないことを聞いてしまったかもしれないと、幸四郎は少し後悔した。

「嫁さんか。いずれは、欲しいものだな」

「まさか、教授は独身ってわけじゃないでしょう。お亡くなりになっても…」

春菜も立ち入ったことを聞いてしまったと後悔した。

「心配はいらないよ。私は結婚をしたことはないからね。かけるは5年ぐらいまえに、発掘現場で記憶喪失の状態で見つかったんだ。

まだ、小学生5年生だった」

「記憶喪失なのに、年齢はわかったんですか」

「変だろ。でも、かけるはランドセルをしょっていた。中身は、小学5年生の教科書。名前は不思議なことに、土岐かけるって書いてあったんだ」

「同じ苗字だったのね」

「偶然にしちゃ、できすぎている気もするけど」

「そのまま、施設に預かってもらうこともできたんだけど、何か気になる子どもでねえ。私に着いて来るかって聞いたら、一緒に行きたいっていうんだよ」

もともと教授は子どもが好きであった。かけるのことを不憫に思

った教授は、引き取ることにしたのだ。仕事から、いつもそばにいてやることはできなかったが、かけるはさびしがることはなかった。教授の仕事は発掘現場であるため、転校も多かった。そのためか、かけるは特定の友達を作ることがなかった。友達といえば、もっぱらパソコンである。外で遊ぶこともなく、いつもパソコンとにらめっこをしていた。この5年間で集積した知識は相当なものだ。今や、教授よりも詳しい分野も多いという。

「まったく、変な子でね」

「あら。頼りになるわよねえ、幸四郎」

「そうさ。今となつては、強力な協力者だよな」

「そうか。それは良かった。あの子にも、やっと友達ができたんだな」

*** ブルブル、ブルブル *****

「春菜。携帯ブルってるぞ」

「噂をすれば何とやら。きっと、博士よ」

予想通り、博士からメールであった。元の世界に戻れた安堵感と二人めの協力者に出会い、つかの間の安らぎを覚えていた春菜と幸四郎であった。しかし、メールの内容は風雲急を告げるものであり、またしても時空の旅に出かけるはめになるうとは、この時の二人には知る由もなかった。

？忘れ物

？忘れ物

『もうそろそろ、元の世界に戻れたのではないかと思う』

「さすが、博士ね。何でもお見通しだわ」

「続きはなんて書いてあるんだ」

『そして、おそらくそこは発掘現場。今までの子たち、もみな戻ってきたのは発掘現場からだった。そこで、きみたちは僕の父に会って、今までのことを話しているころだろう。ぼくの生い立ちもわかったのではないかな。母親はある日突然いなくなったと話したけど、いなくなっただのは、むしろ僕の方だったのかもしれない。父親は誰か知らない。というよりも、過去の記憶があまりないんだ。そして、僕自身も発掘現場で現れた。きみたちと何か共通点があるような気がしてならない。教授もその研究をしているんだけど、僕も自分の謎をとくために、教授と一緒に暮らす道を選んだ』

「そうか。まだ小学生だったのに、あの子はそんなことを考えていたのか」

教授の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

『でも、同情は無用。おかげで、マヤ文明の資料や過去のメッセンジャーのことも知ることができた。きみたちは、どうやら最後のメッセンジャーになりそうな気がしている。おそらく、教授もそう思っているに違いない』

「ほんとなの、教授」

「ああ。任命の間隔が短くなってきていることから、おそらくきみたちが最後のメッセンジャーになるだろうな」

『ところで、心配ごとが一つある。元の世界に戻るときには、何かに落ちる感覚がすると思うんだが、そこで何かを落としてしまうと大変なことになるんだが、落し物や忘れ物はしなかったかい』

「春菜。おまえそそつかしいから、何か落としてないか」

「何よ。手紙だつてちゃんと持つてるし、幸四郎こそ大丈夫なの」

「俺が忘れ物なんかするわけないじゃないか。だいいち、手荷物なんか持つていないし」

「そつよね。落ちるとしたら、ポケットにあるものぐらいよね」

「財布もあるし、生徒手帳もあるし、家の鍵もあるし」

「そついえば、幸四郎。ライター持つてなかった？」

「持つてるよ。明かりをつけるとき使ったやつだろ。ええと、ええと、ええと」

「どうしたの、幸四郎」

「ない！ライターを落としちゃったみたいだ」

それを聞いていた教授の顔が曇った。

「まずいものを落としてしまったね」

「どうということなの、教授」

「文明に関するものは、歴史を変えてしまう恐れがあるんだ」

教授の説明によると、春菜と幸四郎が通ってきた秘密の抜け穴は異次元空間であり、過去や未来に通じているという。そこで、落としたものや忘れたものが、もしも過去から来た人たちの手によって拾われ、過去の世界に持ち返られるようなことがあると、歴史が変わってしまうらしい。

「どうしよう、幸四郎」

「どうしようって、取りに帰るしかないだろう」

「どこへ」

「先ほどまでいたところへだよ」

「どうやって」

「そんなこと、わからないさ」

幸四郎はどうしてよいかわからなかったが、道は必ず開けるとそんな予感がしていた。

「教授。戻る方法ってあるの」

「それはあるだろうね。向こうからこちらへ来れたってことは、こ

ちらからも向こうへ行けるってことなんだ」

「どうやって行くんですか」

「それは、かけるの方が詳しいと思うよ」

「何ですって」

「そうか。鍵は博士になりそうだな」

*** ブルブル、ブルブル ***

「グッドタイミングよ、幸四郎」

「ああ。博士からのメールに違いない」

二人の運命は、博士のメールにゆだねられたのであった。

？博士との再会

？博士との再会

『困ったことがあれば、うちに来てくれ。場所はもう知っているよね。おおかた、幸四郎くんが何かを落としたか忘れたかしてしまっただのではないかな。見るからにそっかしそうだったからね。そうではないことを祈るが、まあ、いつでも来てくれたまえ。大歓迎する』

春菜は博士からのメールを読み上げた。

「ほら。博士も、そっかしいのは幸四郎の方だって言ってるじゃない」

「そんなことより、今は戻るのが先決だ。教授、ここから博士のうちにどうやっていくんですか」

「もうすぐ暗くなる。山越えは危険だな。今日は、私が車できみたちの家まで送っていいこう。かけるに会うのは明日にした方がいいよ」

「そうしましょう、幸四郎」

「そうだな。あせっても仕方がない。ゆっくり、対策を考える必要がありそうだ」

こうして、春菜と幸四郎は教授の車で自宅の近くまで送ってもらった。

「教授、ありがとうございます。ここまで来れば歩いて帰れます」

「いいのかい。家の前まで送ってあげるよ」

「ああ、大丈夫です。本当にありがとうございます」

あたりは薄暗くなっており、もうすぐ夕飯の時間だ。

「じゃあ、気をつけてね。発掘現場にもまた来てくれないかな。きみたちは、貴重な研究の対象なんだから」

「わかりました。明日にでも、また伺います」

二人は教授の車を降りた。

「さて、春菜。これからどうする？」

「どうするって、家に帰るんじゃないの」

「おまえ、自転車どうした」

「いけない。秘密基地に置いたままよ」

「だろ。つまり、俺たちは秘密基地にもう一度行くしかないってことだな」

「そのようね」

春菜の自転車を取りに、二人は秘密基地に向った。

「ねえ、幸四郎」

「なんだい」

「どうして教授に秘密基地まで送ってもらわなかったの」

「もうすぐ夜になるんだぞ。心配するじゃないか。だって、俺たちはこれから博士のうちにいくんだぜ」

「そうか。このまますんなり家に帰るような幸四郎じゃないと思ってたわ」

春菜の顔はいたずらっぽく輝いた。どうやら、こんな時間から博士のうちに行くことに異存はないようだ。

ようやく、二人は秘密基地に着いた。

「真っ暗になっちゃったわね、幸四郎」

「ああ、止めるか」

「わけないでしょ」

「だよな」

その時である。

「やだ、こんな時に」

「こっちもだ」

二人の封筒は、またしても光ったのである。

「まずは中に入ろうぜ」

「そうね」

二人は秘密基地の中に入った。

「だめだ、春菜」

「どうしたのよ」

「ライターがないから、ローソクに火が灯せない」

「そうか。そっかしい幸四郎はライターを落つことしちゃったものね。それを探しに行こうとしていたのよね」

「おい、春菜」

「何よ」

「そっつかしいは、余分だろ」

「とにかく、こらじゃあ手紙も読めないわね。行っちゃいますか」

「ああ。いざ、博士のもとへ」

すっかり暗くなった裏山を、二人は再び登り始めたのであった。暗闇の中の裏山は、いつもと景色が違って空には満天の星が輝いていた。

「ねえ、幸四郎。星ってこんなにあつたっけ」

「ああ、すごいな。あれが北極星だろ」

「そうね。カシオペア座のWを伸ばしたところにあるのよね」

「おまえ、何座だ」

「私はおとめ座よ。幸四郎は」

「俺はさそり座」

星座にあまり詳しくない二人は、それ以上の会話が続かなかった。見て、幸四郎。明かりが見える」

「きつと、博士のうちだ」

ようやく二人は、博士のうちにたどり着くことができた。長いような短いような時間であった。

「博士いるー」

いきなり春菜は大声を出した。

「やあ、きみたち。やっぱり、来たんだね」

「やっぱりって、俺たちが今日くることもお見通しだったってことかい」

「そつだよ。予測より3分遅れだ。きつと、きれいな夜空にでも見とれていたのだろう」

図星であつた。

「あいかかわらず、すごいわね、博士。じゃあ、何でこんな時間に訪ねてきたのかもわかるかしら」

「落としちゃったんだろうね、何かを。しかも、文明の利器だろうな。とはいえ、学校帰りのきみたちが特別なものを持っていたとは思えない。しかし、ボールペン１本でも立派な文明だ。たいしたものではないが、過去の世界にあつては不都合なものを落としてしまったんだろう。前回きみたちが来た時のことを思い出してみようか。手紙はさすがに落とさないだろうし、そう言えば一通目の手紙はあぶり出しになつていたね。かすかに口ウの匂いもしていたから、ローソクを使つてあぶり出したんだろう。ということは、火をつけるものが必要だ。マッチかライターだろうな。今どきマッチは持つていないか。つてことは、落し物は１００円ライターといったところかな」

「すごいな、博士。それでこそ、来た甲斐があるというものだ」

「そうね。だから、私たちライターを取り戻しに行かなければならないの。どうやったら、行けるかしら」

「そんなことなら、簡単さ。きみたちならね」

博士は、分厚い眼鏡を光らせ微笑むのだった。

？5 通めの手紙

？5 通めの手紙

「幸四郎、大変！」

「こんなときにかよ」

「私も見ましたよ。確かに光りましたね」

「春菜、見てみるよ」

「ええと、待つてよ。」

*** あせつてはならぬ 己を信じること、人を信じること *

あせつちやいけないのね。それに自分を信じなさいか。何を信じるのかなあ。人も信じなさいって、これじゃあ皆信じなくちゃいけないわね。幸四郎の方は？」

「*** 信じるべき人を見極めよ 信じるべき事を見極めよ *

やっぱり、俺たちのメッセージは対になっているようだな。信じるべき人は、今のところ博士と教授だよな。信じるべき事ってのは何だろう。博士、何か心あたりある」

「それを、きみたちで見極めろってことなんだろうね。僕が今できることは、幸四郎くんがライターを落としたであろう場所への行き方を教えてあげるぐらいのことしかできないな」

「そうだよな。今はライターを取り戻すのが先決だ。万が一、恐竜時代の人がライターを持ち帰りでもしたら大変だ」

「そうよね。歴史が変わってしまうわね」

「おいおい、きみたち。恐竜時代には人類はまだ誕生していないよ」

「あはは、さすが博士。とにかく、ライターを探しにいかなくちゃならないことは確かだ」

「そうよね。どうやって行けばいいの、博士」

「先ほどと同じ道順で行けば、同じところにたどり着けるはずさ」
「また、頂上まで登るのかよ」

幸四郎はすっとんきょうな声を上げた。

「どうしよう、幸四郎。真夜中になっちゃうわね」

春菜も困惑気味である。

「今日、行くかどうかはきみたちしだいさ」

博士は二人に諭すように言った。

「春菜。今日はもう遅いから、おまえは帰りな」

ここで、幸四郎はある決断をしたのであった。

「幸四郎はどうするのよ」

「俺は博士にちよつと話があるんだ。話が終わったらすぐ帰るから、春菜さきに帰ってな」

「そう、わかったわ。もう暗くなってきたし、じゃあ、私さきに帰るわよ」

春菜も何かを感じたらしく、いつになくおとなしく幸四郎の言葉に従った。

「帰っちゃったね、幸四郎くん。これで、良かったのかい」

「ああ。元はと言えば、ライターを落としたのは俺だ。こんな時間から、女の子を連れ回すわけにもいかないだろう」

幸四郎は春菜のことを思い、自分一人でライターを探しに行こうと決意したのであった。

「きみって、いい奴かもしれないね」

「何言ってんだよ。そんなんじゃないよ。足手まといになるといけないと思っただけさ」

幸四郎は、博士の言葉を何故かあわてて取り消した。

「まあ、いいよ。いずれにせよ、幸四郎くんは今から行くんだね」

「もちろんさ」

「いい選択だ」

「ありがとう。博士に賛同してもらえると、何だか自信が湧いてくるよ」

「己を信じることだね」

「じゃあ、さつそく出かけるよ」

「気をつけてね」

幸四郎は、一人博士の家を出た。頂上へ向い歩き出そうとしたその時である。

「ジャツ、ジャーン」

「おい、春菜。おまえ、帰ったんじゃないのか」

「どうせ、こんなことだろうと思ったのよ。私を置いて、一人で行く気だったんでしょ」

「それはそのう……」

「さあ、行くわよ幸四郎」

「おまえ、両親が心配するぞ」

「今日は友達んちで、泊まりで宿題を片付けるって連絡しておいたわ。幸四郎こそ大丈夫なの」

「いけねえ。何の連絡もしてないや」

「安心して。宿題をやる仲間に幸四郎も入れておいてあげたわ。幸四郎のお母さんにも電話しておいてあげたんだから」

「用意がいいな」

「これなら、私を置いていくわけにはいかないでしょ」

「春菜には、かなわないなあ」

「信じるべき人を見極めただけよ」

春菜は小声でつぶやいた。

「確か一本道だったよな」

幸四郎は頂上を眺めており、春菜の声には気付かなかった。

こうして二人は暗闇の中、再び頂上を目指し出発するのであった。

？昼間と夜の違い

？昼間と夜の違い

「さあ、春菜。再度、挑戦だ」

「そうね。まずは、立ち入り禁止区域まで行かなくちゃ」

「ああ。行こうぜ」

二人は、さっそく山道を登り始めた。登り始めること30分。

「おかしいわね、幸四郎」

「ああ。立ち入り禁止区域なんか出てこないな」

「道を間違えちゃったかしら」

「おいおい。1本道だったじゃないか。間違えようがないだろう」
いくら夜の山道とはいえ、1本道では間違えようがない。

「じゃあ、あれかしら」

「何だよ、あれって」

「道が変わっているってこと」

「どうということだよ」

「時間とともに、道が変化してるんじゃないかしら」

「だとしたら、大変だ。早く探さないと、入り口がどこかへ行っちゃうぞ」

すると、二人の目に立ち入り禁止の標識が見えてきた。

「あつ、あれ、標識じゃない？きつと、まわりが暗いから時間の過ぎるのが遅く感じただけかもしれないわね」

「だといいけどな」

二人は標識に近づいた。

「違うわね」

「ああ、違う。昼間見た標識とは違うな」

ブルブル、ブルブル。ここで、春菜の携帯が振動した。

「あら、博士からよ」

「なんて書いてあるんだ」

「ちよつと待つてよ。『夜の景色は昼間とは違ふ。時間の流れも違ふように感じるはずだ。きみたちは、おそらく戸惑っていることと思う。でも、そんな時こそメッセージを思い出すんだ。信じるべき人を見極め、信じるべき事を見極めるんだ』」

「そうか。ここは、博士を信じるしかないな」

「幸四郎はそう思うの」

「当たり前だろう。他に誰を信じるというんだ」

「じゃあ、私も信じるわ」

春菜の信じる人は、どうやら博士ではないようだ。

「問題は、信じるべき事は何かってことだな」

「博士は言っていた。同じ道順で行けばたどり着けるはずだと。ここで、道は二手に分かれている。おい、春菜。どちらへ行つたか覚えてるか」

「それが、不思議なんだけど、覚えていないのよね。そもそも、二手に分かれていたのかしら」

「だよな。1本はおそらく、幻覚。正解は1本しかないはずだ。おい、春菜。何してるんだよ」

「確か、メッセージにあつたでしょ。迷つたときは心で感じる、頭で考えるのではなく心の目を開けてね」

春菜は目を閉じて、心で感じようとしていたようだ。

「で、見えたのか」

「ええ。間違いない、右よ」

「なぜだい」

「左にあるのは暗闇、右には光が見えるの」

「そうか、じゃあ右へ行こう」

「えつ、幸四郎も目を閉じて見ないの」

「ああ。信じるべき人は博士だけじゃない。俺は春菜を信じるよ。そして、信じるべき事は、春菜に見えた光さ。おそらく、そこに探しものはある」

「私もそう思うわ」

二人の意見は一致した。信じるべき人、信じるべき事は遠くにあるとは限らない。もっとも信ずるべきは、身近にいる人。今この瞬間で言うならば、春菜と幸四郎がお互いを信じあうことなのではないかと悟ったのであった。

？見覚えのある部屋

？見覚えのある部屋

迷わず右の道を選んだ二人であつたが、自信があるわけではなかつた。とはいえ、左の道を選択する気はさらさらなく、良くて悪くても選択肢は一つしかないのであつた。

「そろそろかな」

「ええ。頂上付近まで来ているはずよ」

あたりは暗闇に包まれており遠くまでは見通せないが、まもなく頂上に着くはずである。二人はそう信じていた。

「やっかいなことに、霧がでてきやがつた」

「見てつ、幸四郎。頂上よ」

二人の眼前に頂上が見えてきた。

「急ぐぞ、春菜。霧がどんどん深くなつてきた」

「そうね。前来た時に避難した小屋はどこかしら」

「確かこちらの方だつたぞ。あつ」

「どうしたの、幸四郎。やだ、うそ」

避難しようとしていた小屋の方角に、小屋は3軒建つていた。

「春菜、もう一度心の目で見てくれないか」

「それがおかしいの」

「どうおかしいんだい」

「3つとも光っているのよ」

「3つともだつて」

「ええ。幸四郎も、目を閉じてみて」

「どれどれ」

幸四郎も目を閉じてみた。

「本当だ。どれも光っているな」

「でしょ。どれが本物かしら」

「やばいぞ、雨がふってきやがった」

「どうしよう。博士、助けて！」

■ □ ■ □ ■ よく見る ■ □ ■ □ ■
「あれ」

「聞こえたわよね」

「ああ、よく見ろって」

「これ以上、何を見ろって言うの」

じっくり考えている暇はない。しばらくの静寂の後、幸四郎の顔に微笑みが浮かんだ。何かひらめいたようである。

「そうか、右だ。春菜、一番右の小屋に入るぞ」

「わかったわ。そうしましょう」

春菜に理由はわからなかったが、こうなれば死なばもろともである。二人は、一番右の小屋に入った。

「どうやら……」

「当たりのようね」

二人が入った小屋は、明らかに見覚えのある部屋であった。

「問題はここからだな」

「ええ。選択肢がどんどん広がっていくわ。それにしても、よくわかったわね。一番右が正解だって」

「ああ。どこからともなく、よく見ろって聞こえただろ」

「確かに聞こえたわね」

「3軒の小屋をよく見たら、雨をはじいている屋根が一つだけあったんだ」

「そうだったの。残りの二つは幻というわけね」

「そうさ。しかし、どんな手がこんできたな」

「そうね。まるで、試されているみたい」

「そう。おそらく、奴らは俺たちを試しているんだ」

「そうかもしれないわね。やだ、光ったわよ」

「俺の封筒もだ」

次なる試験へのメッセージ。メッセージの謎をすべて解き明かし

た時、彼らは正式にメッセンジャーとして認められるのだろう。

「もしかしたら、幸四郎がライターを落としたのも偶然じゃないのかもしれないわね」

「俺も、そんな気がしてきた。再びこの小屋へ訪れたのも、すべては計算されたものかもしれないな」

「とにかく、封筒の中身をみてみましょう」

「そうだな。何をすれば良いかがわかりそうだ」

二人の行動は、何者かによって計算されている。今までのところ、計算どおりに事がすすんでいるようだ。しかし、二人はその計算されたシナリオに反抗しようとは思っていない。ただ、純粹にその謎を知りたいという好奇心が、二人の行動の原動力なのであった。

？ 6 通目の手紙

？ 6 通目の手紙

*** 欲しいものを手に入れるためには、何かを犠牲にしろ *
**

「私、そういうのやだな。何かを手に入れるためには、それと引き換えになる生け贄みたいなものを差し出せってことでしょう」

幸四郎に届いた手紙に、春菜は嫌悪感を感じたようだ。

「そうとも限らない。すべてのものを手に入れようとすると、何も手に入らないってことじゃないかな。春菜の方の手紙はどうだい」

*** 本当に欲しいものは何か、目先の目的にとらわれるな *
**

「うーん。私たちは、今ライターを探しているわよね。幸四郎の落としたライターを持ち帰ろうとしてるのよね。目先の目的はライターを探し、持ち帰ること。でも、それ以外に目的ってあるのかしら」
「それはあるんじゃないかな。持ち帰らなくても、ライター自体を燃やしてしまうとかして消滅させてしまえば目的は達成できるだろそれに…」

「なによ。思わせぶりね」

「それに、本当の目的はライターを探すことではなくて、メッセージの謎を考えさせることかもしれないしな」

「そんなことして、どうするのよ」

「前にも言っただろう。メッセージの主は、俺たちを試しているんじゃないかって」

二人は、しばし沈黙した。自分たちがやろうとしていることは何

なのか。メッセージの謎解きは二人をどこへ誘っているのか。少なくとも、普段の生活では感じなかった疑問や、新鮮な興味をメッセージは与えてくれるのであった。

「それにしても、何かを犠牲にしろとは言ってくれるわね」

「ああ。欲しいものを手に入れるためには、それ相応の犠牲というか、覚悟が必要だってことなんだろう」

「ねえ、幸四郎」

「どうしたんだ、急に」

「ライターを得るために、私を生け贄にしないでね」

春菜の目はいつになく真剣なまなざしであった。

「そんなことするわけないだろ」

いつもなら笑って答える春菜が、今日に限ってはおとなしい。うつすら、涙さえ浮かべているようである。

「大丈夫だつて。生け贄が必要なら、俺が生け贄になってやる。さあ、鬼でも悪魔でもやって来い」

「幸四郎……」

春菜は幸四郎に寄り添った。

「さあ、行くぞ」

こういう雰囲気は、幸四郎は苦手である。やさしく抱き寄せてやるぐらいの配慮があっても良さそうなものだが、今はそれどころではない。女心のわからぬ男子である。

「そうね、行きましょう」

幸四郎のやさしい言葉に、春菜も立ち直ったようだ。それよりも早くライターを探さねばならない。そして、メッセージの謎も解き明かしたい。二人にどんな結末が待っているかが、この瞬間の出来事は忘れようのない時間だった。

第21話 扉の守り人

第21話 扉の守り人

*** ブルルル、ブルルル ***

「あら、博士からよ」

「グッドタイミング。そろそろヒントがほしいところだ」

「選択はますます難解になっていくと思われる。新しいメッセージも届いているだろう。ここからが正念場だ。きみたちは落し物のライターを探しに行っているが、目的はそれだけではない。もっと大きな目的が隠されているはずだ。ヒントは必ずメッセージの中にある。きみたちなら、きつと解明できるはずだ。ぼくからのメールはこれが最後となる。あとは、二人で力を合わせて乗り越えてくれ」

「あまり、ヒントにならなかったみたいね」

「そんなことはないさ。何より、博士は俺たちを信用してくれている。二人で力を合わせれば、なんとかなるって言うてくれるじゃないか」

「でも、博士からのメールが最後になるって、どういうことかしら」
「どうやら、そんなことを考えている暇はなさそうだぞ」

二人の前には四つの扉が現れた。一つめの扉の前には、角の生えた鬼のような番人がいる。二つめの扉には、頭を丸めた僧侶、三つめの扉には杖を手にした仙人、四つめの扉には古代人らしき格好をした人物がいた。

「何よ、あなたたち。どうすればいいの、幸四郎」

「こいつら、何かブツブツいつてるぞ」

四人の番人は、それぞれ何やらつぶやいていた。

鬼　：ここに入りたければ娘を差し出せ。

僧侶：ライターはこの中じゃ。

仙 人：坊主は嘘をついておる。

古代人：こいつらの言うことを聞くな。

「ねえ、幸四郎。誰を選べばいいの」

「弱ったなあ。博士からのメールはもう来ないし。こうなれば、メッセージに頼るしかないな」

「ええと。最後のメッセージは、目先の目的にとらわれるなど何かを犠牲にしろ、よ」

「その中に、必ずヒントは隠されているはずだ。待てよ。こいつらの言っていることは、本当のことなのか嘘なのかってことかもしれないな」

「本当のことを言っているのは一人だけってことね」

「ああ。一人ずつ、試してみよう」

「試すって、どうやって」

「質問を試してみるのさ。まあ、俺に任せておきなうて」

「幸四郎。あなた、なんだか頼もしくなったわね」

謎のメッセージに出会ってまだ1日もたっていないが、春菜は幸四郎が頼もしく見えた。

第22話 禅問答

第22話 禅問答

「ここに入りたければ娘を差し出せ、ブツブツ…」
鬼はつぶやいていた。

「娘を差し出すとどうなるんだい」

「ここに入ることができなんだ」

「入ると何か良いことがあるのか」

「おまえらは、どれかの扉を選ばなければならない。この扉に入らなければ、娘を差し出すのだ」

幸四郎はしばし考えた後、今度は僧侶に質問をした。

「ライターはこの中にあるってのは本当かい」

「ライターはこの中じゃ、ブツブツ…」

僧侶はつぶやいている。

「それは俺の落とした青いライターなのか」

「ああ。青いライターが欲しくば、この扉に入るしかない。じゃが、おぬしにわしを倒せるかな」

仙人を通り越して、古代人らしき風貌の者に幸四郎は質問した。

「こいつらの言うことを聞くなとは、こいつらが嘘を言っているというのか」

「こいつらの言うことを聞くな、ブツブツ…」

古代人は同じ言葉を繰り返すだけである。

最後に、幸四郎は仙人に質問をした。

「隣の坊さんは嘘をついているのか」

「ああ、大嘘つきだ。信じてはいかん」

考え込む幸四郎に、春菜がささやいた。

「わかったの、幸四郎」

「ああ、二人には絞り込めたな」

「私も二人は消せたわ」

「残るはどちらかということだな」

「ええ。私はどちらかといえば、古代人が怪しいと思うんだけど」

「何だって。春菜の消した二人ってのは」

「何言ってるの。鬼と僧侶は違うでしょ」

「なぜだい」

「だって、幸四郎の持っていたライターは赤色だったじゃない。僧侶は違うでしょ。鬼が正しければ、古代人の言っていることが嘘になるでしょ。古代人が正しければ、鬼が言っていることは嘘よ。どちらかは嘘をついているってことね」

「最後のメッセージは目先の目的にとらわれるなど何かを犠牲にするだろ」

幸四郎は、春菜をみつめた。

「変な目で見ないでよ。今、私を犠牲にしようって思ったでしょ」

「そんなことないさ。春菜を犠牲にするぐらいなら、ライターを犠牲にするさ」

「ああ、良かった。それより、幸四郎の絞り込んだ二人っていうのは誰なの」

「僧侶はライターの色を知らなかったから違うだろ。つまり、嘘をついていた。仙人は坊主は嘘つきと言っているからつじつまがあう。古代人はこいつらの言うことを聞くなって言っているから、仙人の言っていることも嘘だっていつてゐるんだろ。つまり、古代人が正しいことを言っているなら、仙人は嘘つきとなり僧侶は嘘つきではないということになるんだけど、僧侶はライターの色を知らない嘘つきなんだ。だから、古代人は嘘つきということになるんじゃないかな」

「なんだか、ややこしいわね。すると、残るは鬼と仙人ということなの」

「でも、春菜の言うように古代人が嘘つきということになれば、鬼は正しいことを言っていることになってしまう。仙人も正しいこと

を言っている。これでは、どちらの扉が正解かわからないなあ」

「ちよつと待って！鬼と仙人は二人とも正しいことを言っているんじゃないのかしら」

「それじゃあ、どちらに進んでいるかわからないだろ」

「そんなことないわよ」

どうやら、春菜はあることに気付いたようである。

第23話 選んだ扉

第23話 選んだ扉

「どうしても解決策がわからない場合、正解を探すことを犠牲にするという選択肢があるんじゃないかしら」

「なんだって」

「それと、最後のメッセージ。本当に欲しいものは何か、目先の目的にとらわれるなというのもヒントになるんじゃないかしら。幸四郎の本当に欲しいものって何？落としたライターなの？」

「今となつては、ライターよりも春菜のことの方が大事だ。春菜を生け贄に差し出すぐらいなら、ライターなんていらない」

二人は、しばしお互いをみつめ、沈黙が続いた。

「もしも…」

先に沈黙を破ったのは、春菜だった。

「なんだい、春菜」

「もしも、目先の目的がライターで本当に欲しいものが私だとしたら…」

幸四郎の瞳が輝いた。

「そうか。鬼は消せるな。だって、鬼は娘を差し出せと言っている。本当に欲しいものを差し出していいはずがない。やったぞ、春菜。

正解は仙人の扉だ」

「だいいけど」

「おい、仙人。おまえの扉が正解だ。そこをどけ」

仙人はニヤリと笑った。

「よくぞ、たどり着いた。さあ、入るがよい」

仙人は扉の前から後ずさり、進むべき道を開けた。

「やったわね、幸四郎」

「ああ。こうなりや、畏じゃないことを祈るだけだ。行くぞ、春菜」

「ええ、行きましょう。死なば、もろともー」

二人は手をつなぎ、叫びながら仙人のいた扉を開けた。

「あっ」

「えっ、どうして」

幸四郎も春菜も、扉の向こうの景色に驚かざるをえなかった。

「ここは、部屋じゃないか」

「しかも、博士の部屋よね」

仙人が守っていた扉は、なんと博士の部屋へと続いていたのだ。

「そんな、バカな」

「どういふことなの、幸四郎」

驚く二人の前に、奥からゆっくりと博士が歩いてきた。

「あっ、それは」

「幸四郎が落としたライターじゃない!」

博士の手には、幸四郎が落としたライターが握られていた。

第24話 継承者

第24話 継承者

「きみたち、合格だね。幸四郎くんが落としたライターはここにある」

「なんだって。どういうことなんだ」

「きみたちは、メッセンジャーとしての様々な試験に合格した。我々はきみたちを真のメッセンジャーとして改めて任命させてもらう」
「博士。どういうことなの。博士もメッセージの謎を探っていたんじゃないかったの」

「ごめんね、春菜ちゃん。きみたちを試していたのは僕だったんだ」
「なぜ、そんなことをするんだ」

「現在、人類には滅亡の危機が訪れている。その昔、古代マヤ文明は栄えていた。平和なマヤ王国は、いくつもの術をあみ出した。しかし、術とは危険なもの。使い方を間違えば自分たちにも危険が及ぶという諸刃の剣。そこで、術の伝承者は代々決められた者だけに受け継がれてきた。ところが、永遠に繁栄すると思われていたマヤ文明にも終焉の時がきた。そこで、術の伝承者があいまいになってしまった。本来、知ってはならぬ者へ情報が漏洩してしまった。それでも、正統的伝承者はできる限り術がもれぬよう努力した」

「現代にも受け継がれている術はあるんかい」

「ああ。正しく受け継がれているものもあれば、間違っただけで伝わっているものもある。医学や科学のほとんどはマヤ文明に確立されたものだ。呪術や祈祷なども開発されていた」

「確かに悪い人が使ったら、危険よね」

「でも、おれたちに何をさせようってんだ」

「きみたちに、術の善悪を判断してもらいたいんだ」

なんと、幸四郎と春菜に課せられたのは術の事業仕分けであった。

「そんなあ。今まではどうしていたの」

「今までは、マヤ文明の子孫である僕たちが、何とか防いできた」

「これからも、頑張ってくれよ」

「ところが、マヤ文明は2012年に終焉を迎える。これは、決定済みの事実なんだ」

「博士。どういうことなの。人類が減ぶっていうことなの」

「人類が減ぶかどうかはわからない。ただ、マヤ文明の子孫は、その年にいなくなるということだ」

「もしかして、博士はマヤ王国の正統的継承者なのかい」

「そんなことはどうでもいいじゃないか。ただ、言えることは、2012年までに私の継承者を見つけなければならぬんだ。マヤ文明は終わりを告げる。これからの人類を救えるかどうかは、次の継承者にかかっている」

「そんな、無理よ。私たちにそんな大役は務まらないわ」

「よせ、春菜。博士は、何人ものメッセンジャー候補から、最終的に選んだのが俺たちなんだ」

「その通り。それに、もう時間がない」

「まだ、2年もあるじゃない」

「きみたちは、メッセンジャーになりうる資格を持っていることがわかった。しかし、真のメッセンジャーになるには素質のあるもので、最低2〜3年の修行が必要だ。もう期間がないんだ。もちろん、修行は強制的なものではない。受けるかどうかはきみたち次第だ」

「どうする、幸四郎。なんだか大変なことになっちゃってるみたいだけど」

「ああ。博士、もしも俺たちがその修行を受けなかったらどうなるんだい」

「われわれには、術とともにそれを抑制する戒律という力がある」

「そうか。術は正しく伝承されなくても、使われる心配はないということか」

「そう。2012年まではね」

「どうということなの、博士」

「戒律の力が及ぶのも2012年までということさ。人類の歴史が2012年で終わるのか、それ以降も続くのかは、きみたちの決断にかかっている」

「残り2年の修行で、必要なことを身につけられない場合にも…」

「そう。人類は遠からず滅びることとなる」

「どうする、幸四郎」

春菜は決断を幸四郎に任せようと思っていた。幸四郎が決めたことなら、どんなことにも従うつもりである。わずか一日足らずの共有する時間が、二人の絆を限りなく深めていた。

「決まっているだろ、春菜。こんな面白いことはないじゃないか。」

せっかくメッセンジャーに選ばれたんだ。やってやろうじゃないか」

「そうこなくちゃね、幸四郎」

春菜と幸四郎は、自分たちがマヤ文明の、いや人類全体の継承者になることを決意した。

「きつと、そう言ってくれると思っていたよ」

博士も継承者が決まり、安堵した。

「では、手始めに…」

二人の長く辛い修行は始まった。

第24話 継承者（後書き）

次回ついに最終章。驚愕の結末を迎える。

最終章 修行の果てに（前書き）

いよいよ最終章。修行を終えた春菜と幸四郎に待っていた未来とは。

最終章 修行の果てに

最終章 修行の果てに

「やったぞ。ついに、完全習得だ」

「がんばったわね、幸四郎」

二人は2年にわたる長く辛い修行に耐え、カリキュラムをすべてこなした。

「きみたちなら、間に合うと思っていたよ。これで、僕の役目も終了だ。あとのことはきみたちに委ねる。それにしても、長かった。僕も疲れてしまった。ああ、眠くなってきた。悪いが、少し眠らせてもらおうよ」

「博士。寝ちゃダメだ」

「博士っ、博士ったら」

長きにわたり人類滅亡を救おうと奮闘してきたマヤ王国の継承者カケル。その役目を終え、蓄積された疲労が一気に襲ってきたようだ。役目を終えたものの行く末を、春菜と幸四郎は微妙に感じていたのである。

「眠っちゃったわね、幸四郎」

「ああ、大丈夫かな。マヤ文明は2012年に終焉を迎えるって言っていたけど、それは新しい時代の始まりを意味するんじゃないかな」

「あら、なんか変だわ。私も眠くなってきちゃった」

「そっいえば、俺も急に眠気が…」

「ああ、眠い。いやだ、もう7時じゃない。今日も遅刻しちゃうわ」
春菜は高校一年生。早起きがちょっぴり苦手な女の子である。

「あら。これ、何かしら」

目覚まし時計の横には、見覚えのある封筒が置いてある。

「幸四郎、遅れるわよ。起きたのー」

母親の声で幸四郎は目が覚めた。

「うわっ。やっべー。7時半かよ。遅刻、遅刻。あれっ」

幸四郎の枕元には、見覚えのある封筒が置いてあった。

「はあ、はあ。春菜、おはよう」

自転車をこぎながら必死な形相をしている春菜に、これまた死に物狂いで全力疾走をしている幸四郎が声をかけた。

「なあに、今日も幸四郎と同じ時間なの。遅刻決定じゃない」

春菜は自転車をこぐ力を弱めた。

「俺もがっかりだよ。ここで春菜に出会って、間に合ったためしはないからな」

幸四郎も走るのを止めた。

「ねえ、幸四郎。私、今朝変な夢を見たの」

「気にするな。それより、今日は西暦何年の何日なのかな」

「なによ、突然。それより、幸四郎っていつもポケットにライター入れてたわよね」

「よく知ってるな。秘密基地のローソクをつけるやつだろ」

「そうそう、赤いライター」

「色まで覚えてるのか。それならここに…」

「どうしたの、幸四郎」

「いや、なんでもない。さあ、早く学校へ行こうぜ」

「そうね。今日はなんだか、転校生が来そうなのがするわね」

「ああ、そうだな。カケルって名前の子がね…」

*** 時代はまわる、時はかける ***
*** 振り向くな、立ち止まるな ***

最終章 修行の果てに（後書き）

長いあいだご愛読ありがとうございました。また、お会いできます
日を楽しみに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161k/>

メッセージ

2010年10月8日14時23分発行